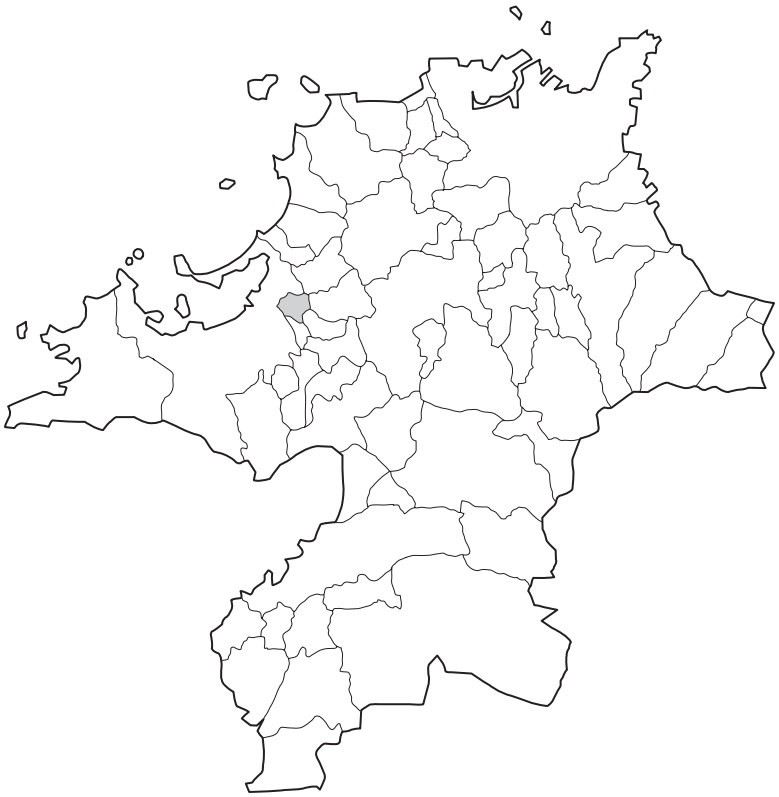
粕屋町文化財調査報告書第 57 集

# 仲原池ノ内遺跡第 2 地点

福岡県糟屋郡粕屋町仲原二丁目所在遺跡の調査



2022

粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、粕屋町仲原二丁目に所在する仲原池ノ内遺跡第２地点について、令和２（2020）年度に粕屋町教育委員会が実施した民間開発に伴う発掘調査の成果を記録したものです。

仲原池ノ内遺跡第２地点周辺は、仲原池ノ内遺跡第１地点や仲原峯屋敷遺跡、志賀神社遺跡で古代から中世にかけての集落跡が確認されています。今回の調査でも中世の掘立柱建物や土壙墓などが発見され、この地域で連綿と集落が営まれていたことが再確認され、町内の歴史解明に寄与するものと考えられます。

本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に御協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様に心から謝意を表します。

令和４年３月31日
粕屋町教育委員会
教育長　西村　久朝


2　**経過・位置と環境**

2 調査に至る経過

2 調査体制

2 地理的環境

2 歴史的環境

4　**調査成果**

4 調査概要

5 掘立柱建物

7 土坑

8 土壙墓

9 ピット出土遺物

10 包含層出土遺物

11 おわりに

12　**図版**



| | |
|---|---|
| 発行 | 粕屋町教育委員会 |
| 調査起因 | 宅地造成、専用住宅建築工事 |
| 現地調査 | 令和３(2021)年１月５日～令和３(2021)年３月４日 |
| 整理調査 | 令和４(2022)年２月１日～令和４(2022)年３月31日 |
| 使用方位 | 座標北(国土座標第Ⅱ系[世界測地系])。真北に対して0°17′西偏。 |

遺構実測・遺構写真　朝原泰介
遺物実測　尾方禎莉
執筆　福島日出海
遺物写真・製図・編集　髙橋幸作
資料整理　常盤津由美、松永メイ子、毛利須寿代

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。

# 経過・位置と環境

調査地周辺は弥生時代から中世にかけて連綿と歴史を追うことができる地域である。近隣の志賀神社遺跡では弥生時代前期の環濠、横穴墓、中世の居館跡が確認されており、仲原池ノ内遺跡第１地点では古代の集落跡が見つかっている。

## 調査に至る経過

仲原池ノ内遺跡第２地点の発掘調査は福岡県糟屋郡粕屋町仲原二丁目 2039-7 において、宅地造成及び専用住宅（分譲）建築工事が計画されたことに起因する。

令和２（2020）年 10 月 13 日に株式会社一建設より粕屋町教育委員会へ事前審査願書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である仲原池ノ内遺跡に含まれており、別件にて令和２（2020）年５月 19 日に確認調査を実施し、古代の遺構、遺物を確認している旨の回答を行った。確認調査結果をもとに協議を重ねたが、建築工法計画の変更は難しく、建築工事によって遺跡の破壊が免れないため、記録保存の発掘調査を実施した後、建築工事に着手することとなった。

令和２（2020）年 12 月 15 日に緊急発掘調査に関する委託契約を土地所有者である山田隆徳氏と締結し、発掘調査を実施した。

調査期間は、令和３（2021）年１月５日から令和３年（2021）年３月４日まで実施した。

発掘調査報告書作成に係る出土遺物整理作業は、令和４（2022）年２月７日から令和４（2022）年３月 31 日の期間で行った。

出土遺物および図面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

## 調査体制

令和２(2020)年度
調査主体　粕屋町教育委員会
教育長　西村 久朝
社会教育課長　新宅 信久
同課文化財係主幹　西垣 彰博
同課同係主任主事　髙橋 幸作
同課同係会計年度任用職員
　　朝原 泰介(調査担当)
　　上田 津由美
　　福島 日出海
　　松永 メイ子
　　毛利 須寿代

令和３(2021)年度
調査主体　粕屋町教育委員会
教育長　西村 久朝
社会教育課長　新宅 信久
同課文化財係主幹　西垣 彰博
同課同係主任主事　髙橋 幸作
同課同係会計年度任用職員
　　常盤 津由美
　　尾方 禎莉
　　福島 日出海(報告書担当)
　　松永 メイ子
　　毛利 須寿代

## 地理的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は 14.13km² と狭く、大半が平坦な地形である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は四王寺丘陵部によって福岡平野と区分される。東側の三郡山地を源とする３本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいる。平野の北側には立花丘陵部があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。平野内は東の三郡山地から舌状に派生する低丘陵が多く伸びているため、平坦な地勢の割に沖積地は河川流域に限られている。

仲原池ノ内遺跡第２地点は、福岡市との町境に近い須恵川下流域の舌状低丘陵上に立地している。古代の周辺環境は、多々良川・須恵川・宇美川の合流する河口付近が、入江状の内海を形成していたと想定されている。遺跡はこの内海に近く、博多湾と３本の河川を利用した海上・河川交通の集中する場所にあたる。

## 歴史的環境

粕屋町周辺は、博多湾東岸に位置するという立地環境もあり、早くから大陸・朝鮮半島との交流が認められる地域である。

古墳時代では、多々良川流域に前期前方後円墳である戸原王塚古墳、内橋カラヤ古墳、名島古墳（福岡市）が築造される。後期になると推定全長 75m ほどの前方後円

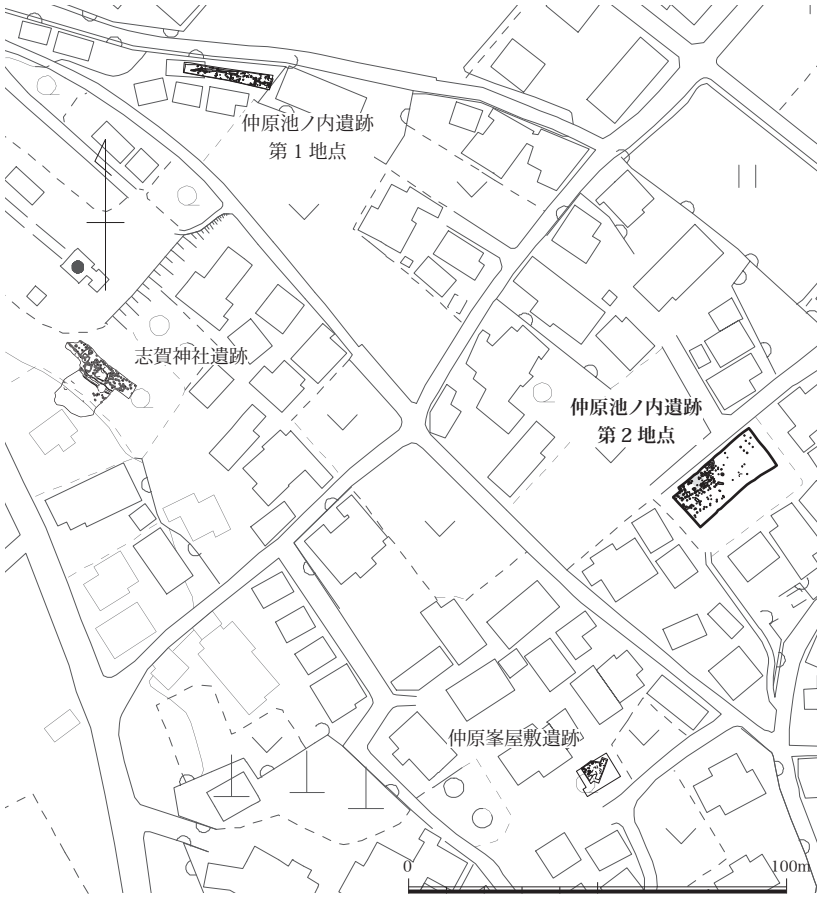
墳である鶴見塚古墳が須恵川流域に築造される。現況は宅地化が進んで半壊状態であるものの、近世地誌『筑前国続風土記拾遺』に江戸時代当時の鶴見塚古墳の状況が詳細な計測値とともに記されており、墳丘規模、墳丘形態・石室規模なども克明に読み取れる。これは那津官家の管掌者の墓といわれる東光寺剣塚古墳（福岡市）と同規模・同主体部であり、『日本書紀』継体22年の糟屋屯倉との関連が示唆される。

古代になると糟屋郡衙である阿恵官衙遺跡が置かれる。7世紀後半から8世紀後半にかけて、政庁と正倉という地方官衙の主要施設の全体像を捉えながら、評衙の出現から郡衙の最盛期に至るまで地方官衙の変遷を追うことができる国内でも稀な遺跡である。さらに、京都妙心寺梵鐘銘「糟屋評造春米連廣國」により人物名が判明している。文字資料により評の長官名が判明し、発掘調査によって評衙の場所が明らかにされたのは、阿恵官衙遺跡が唯一であり、その歴史的価値は極めて重要である。

中世の遺跡は、志賀神社遺跡や戸原麦尾遺跡、戸原五寸田遺跡、原町平原遺跡などで確認される。粕屋町周辺は建武3（1336）年に足利尊氏と菊池武敏が戦った多々良浜の戦いの地であり、その時期を境に遺跡は廃絶する傾向にある。

粕屋町は、連綿と遺跡が所在し、古代においては糟屋郡の役所跡も所在する。古代史を考えるうえで鍵となる重要な要素をもつ地域となっている。

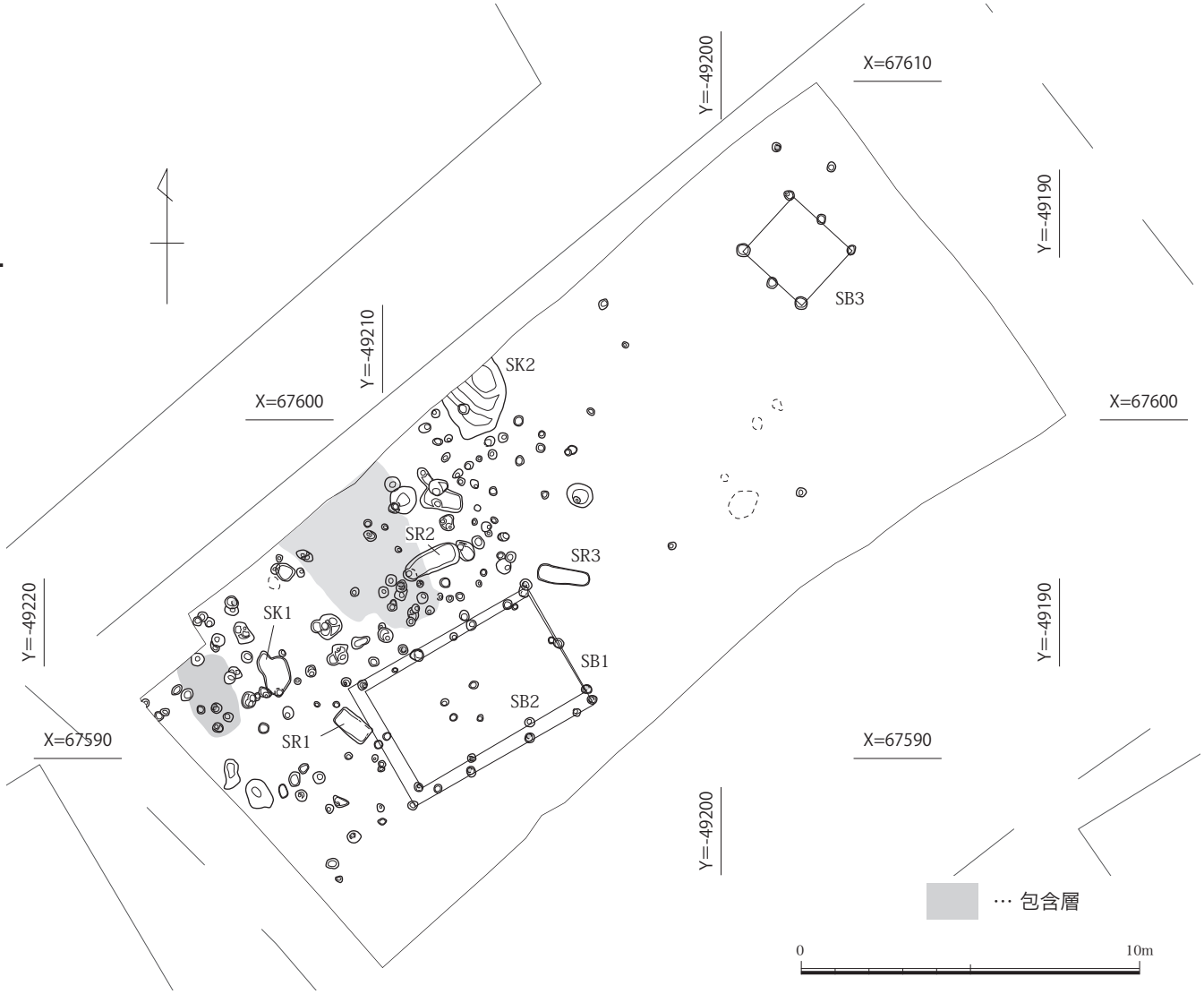
第1図　仲原池ノ内遺跡第2地点周辺の遺跡分布図（1/25,000）




第2図　仲原池ノ内遺跡第2地点周辺図（1/2000）

# 調査成果

調査では、掘立柱建物３棟、土壙墓３基、土坑２基、ピット等を検出したが、掘立柱建物２棟は重複しており、切り合い等の関係から建て替えと考えられる。検出した遺物は、主に 12 世紀頃を中心とする白磁や青磁類等である。




第３図　仲原池ノ内遺跡第２地点全体図（1/200）

## 調査概要

仲原池ノ内遺跡第２地点は、標高約 12.5m の仲原丘陵の北東側縁辺部に立地し、仲原峯屋敷遺跡の北東約 100m、12 世紀～ 14 世紀頃の中世居館と考えられる志賀神社遺跡の南東約 150m に存在する。

調査では、掘立柱建物３棟、土壙墓３基、土坑２基、ピット等が検出され、12 世紀頃を中心とする白磁や青磁等が出土した。調査区内では、主な遺構は南西側に集中しており、重複した２間×３間規模の掘立柱建物２棟や土壙墓、土坑等が検出されたが、北東側は削平が進んでおり１間×2 間の掘立柱建物１棟が検出されただけである。重複した建物は、両者の主軸方位が一致するものの、柱穴の切り合いから SB2 ⇒ SB1 という前後関係が明らかとなった。また、建物の西側、北側、東側に接するように、土壙墓が各１基ずつ存在した。遺物は、12 世紀を中心とする白磁と青磁であり、把手に鉄製釘が挿入されたスタンプ状滑石製品が出土した。

## 掘立柱建物

### SB1（第４図）

桁行３間、梁行２間の建物で、桁行（P1 ～ P8）6.20m、(P3 ～ P6）6.10m、梁行（P1 ～ P3）4.15m、(P6 ～ P8)3.98m を測る。柱穴の深さは、建物の西側が比較的残りが良く、P1、P3 でともに 0.6m を測る。

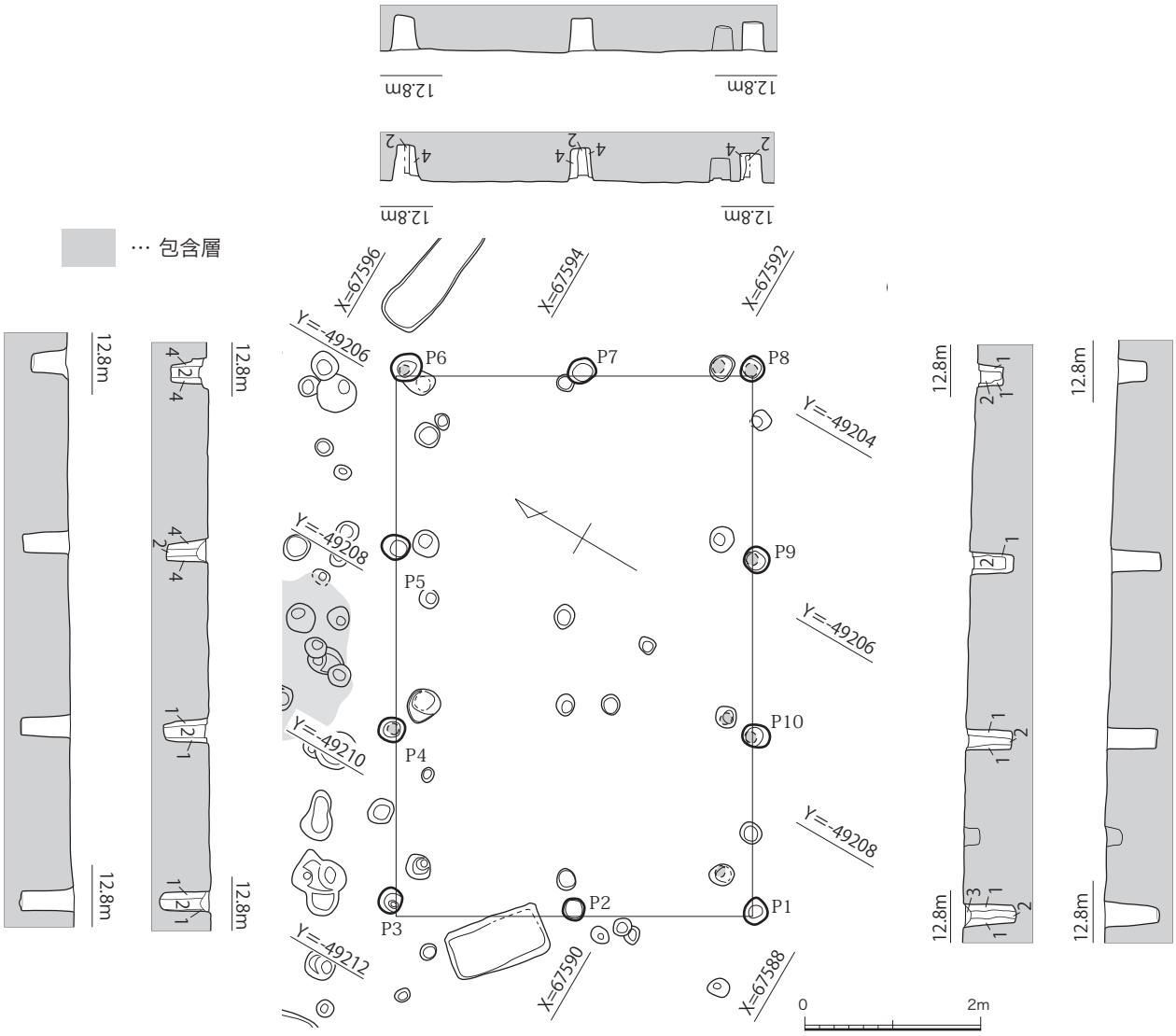
### SB1 出土遺物（第５図）

**1** 土師器（内黒）、椀、高台は低く逆台形を呈し、底部が外方に緩やかな湾曲を示す。残高 1.1cm、底径 7.6cm を測る。色調はにぶい黄橙色、胎土に石英粒と褐色粒子を含み、焼成は良い。**2** 土師器、椀、高台は低く丸みを帯びる。残高 2.9cm、底径 7.6cm を測る。色調はにぶい黄橙色、胎土に砂粒及び黒色粒子を含む。

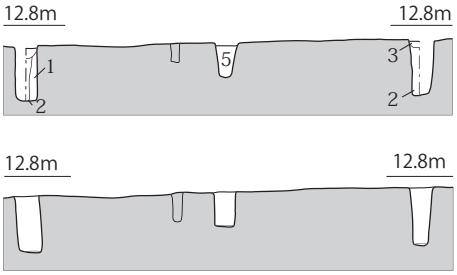
### SB2（第６図）

桁行３間、梁行２間の建物で、

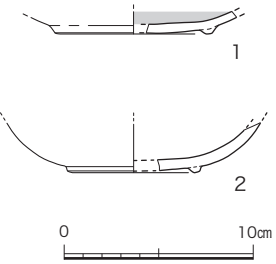





1．明赤褐色粘質土（5YR5/8）に灰黄褐色粘質土（10YR4/2）が混じる
2．褐灰色粘質土（10YR4/1）に明赤褐色土（5YR5/8）が少量混じる
3．灰褐色土（7.5YR4/2）
4．明褐色粘質土（7.5YR5/6）に褐灰色粘質土（10YR4/1）が少量混じる
5．３に赤褐色土 [ 地山土 ]（5YR4/8）が粒状に混じる




第４図　SB1 平面図、土層図、断面図(1/80)




第５図　SB1 出土遺物(1/4)

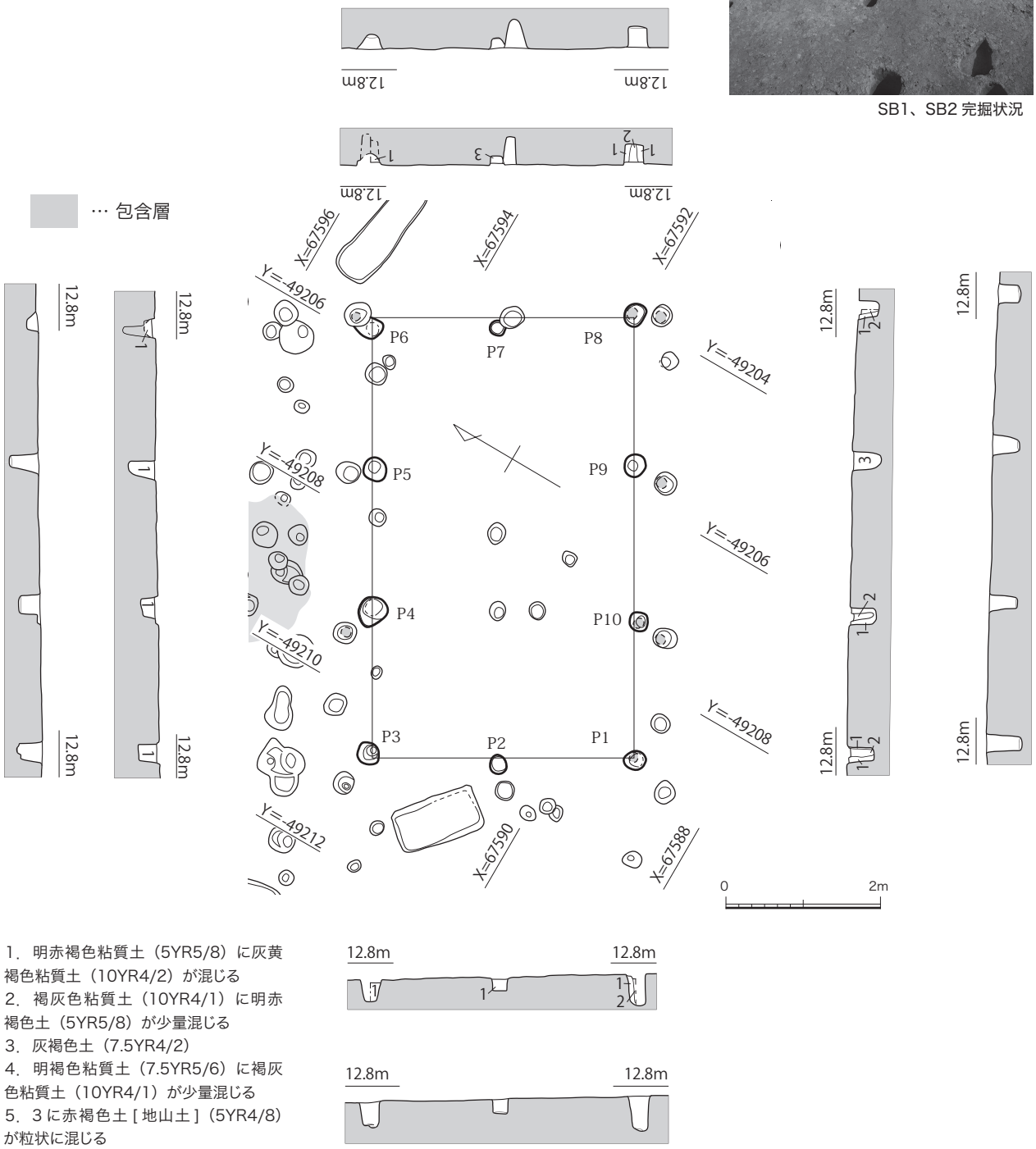
桁行（P1 ～ P8）5.84m、（P3 ～ P6）5.55m、梁行（P1 ～ P3）3.45m、（P6 ～ P8）3.90m を測る。柱穴の深さは、建物の西側が比較的残りが良く、P1 ＝ 0.45m、P3 ＝ 0.45m を測る。出土遺物はない。

SB1 と SB2 の主軸方位は、ともに、N–59.3°–E であるが、それぞれの建物の P6、P7 の 2 箇所が切り合っており、前後関係は SB2 ⇒ SB1 となる。

### SB3（第 7 図）

桁行 1 間、梁行 2 間の建物で、柱間は P1 ～ P2 ＝ 2.13m、P2 ～ P3 ＝ 1.16m、P3 ～ P4 ＝ 1.28m、

SB1、SB2 完掘状況




1．明赤褐色粘質土（5YR5/8）に灰黄褐色粘質土（10YR4/2）が混じる
2．褐灰色粘質土（10YR4/1）に明赤褐色土（5YR5/8）が少量混じる
3．灰褐色土（7.5YR4/2）
4．明褐色粘質土（7.5YR5/6）に褐灰色粘質土（10YR4/1）が少量混じる
5．3 に赤褐色土 [ 地山土 ]（5YR4/8）が粒状に混じる

第 6 図　SB2 平面図、土層図、断面図（1/80）

P4 ～ P5 ＝ 2.12m、P5 ～ P6 ＝ 1.05m、P6 ～ P1 ＝ 1.28m を測る。主軸方位は N−41.3°−E を示し、柱穴の深さは約 0.30m を測る。出土遺物はない。

## 土坑

### SK1（第 8 図）

平面形は、楕円形状を基本とするが北側の一角が突出しており、ピットとの切り合いの可能性が考えられる。長さ 1.42m、幅 0.80m、深さ 0.18m を測る。

### SK1 出土遺物（第 9 図）

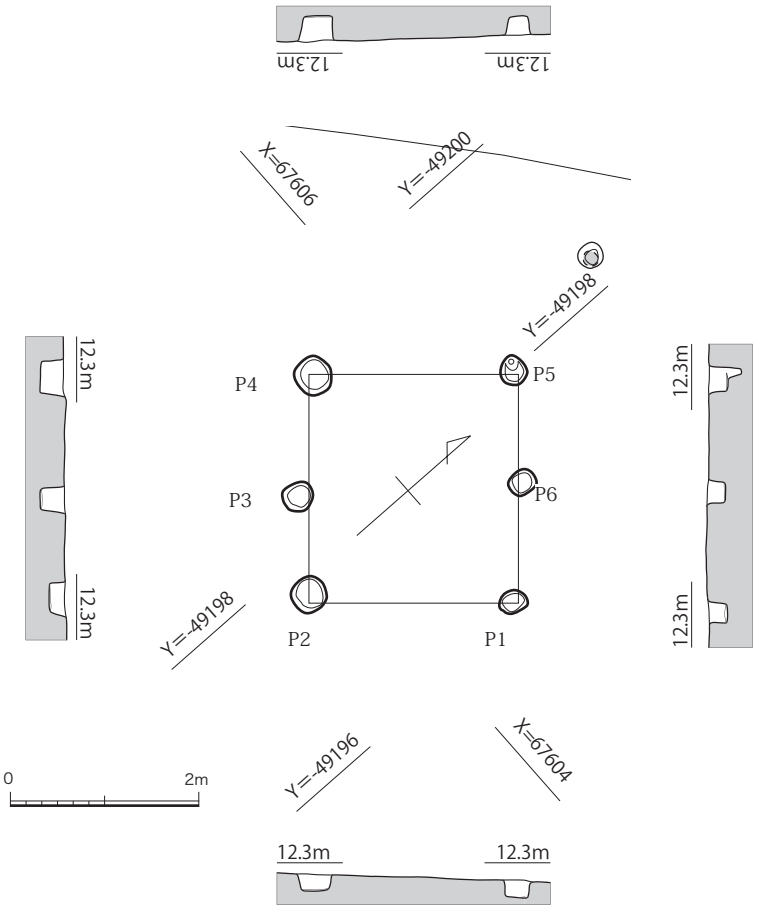
**1** 白磁、皿、口縁端部が内湾気味に直立する。口径 10.0cm、残高 1.3cm を測る。色調は灰黄色、胎土に黒色微粒子を含み、焼成は良好。**2** 須恵質陶器、鉢、口縁部は急傾斜で立ち上り、口縁端部は鋭利である。口径 21.6cm、残高 5.2cm を測る。色調は灰色、胎土に微細な石英及び長石の粒子を含む。

### SK2（第 10 図）

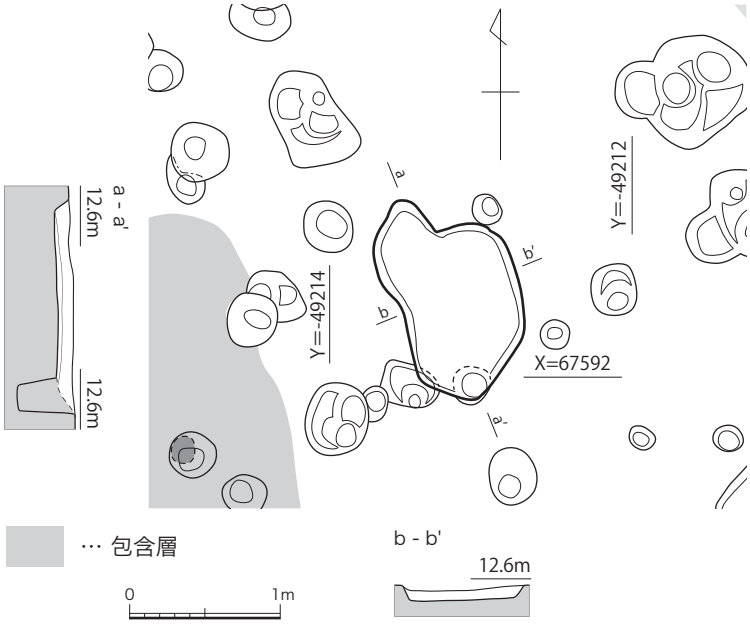
平面形は、不整形で北側が調査区外に続く。内部は複数の段状で底部が楕円形状を呈す。長さ 1.95m、残幅 1.65m、深さ 0.35m を測る。

### SK2 出土遺物（第 11 図）

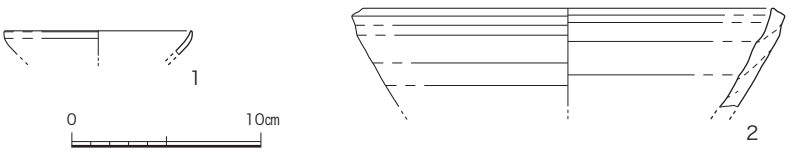
**1** 白磁、椀、口縁部は直線的に開き、口縁端部の上部は平坦でわずかに嘴状を呈す。残高 2.3cm を測る。色調は灰白色、胎土に褐色の微粒子を含み、焼成は良好。**2** 白磁、椀、口縁部は急傾斜を呈し、口縁端部に丸みを帯びる。口



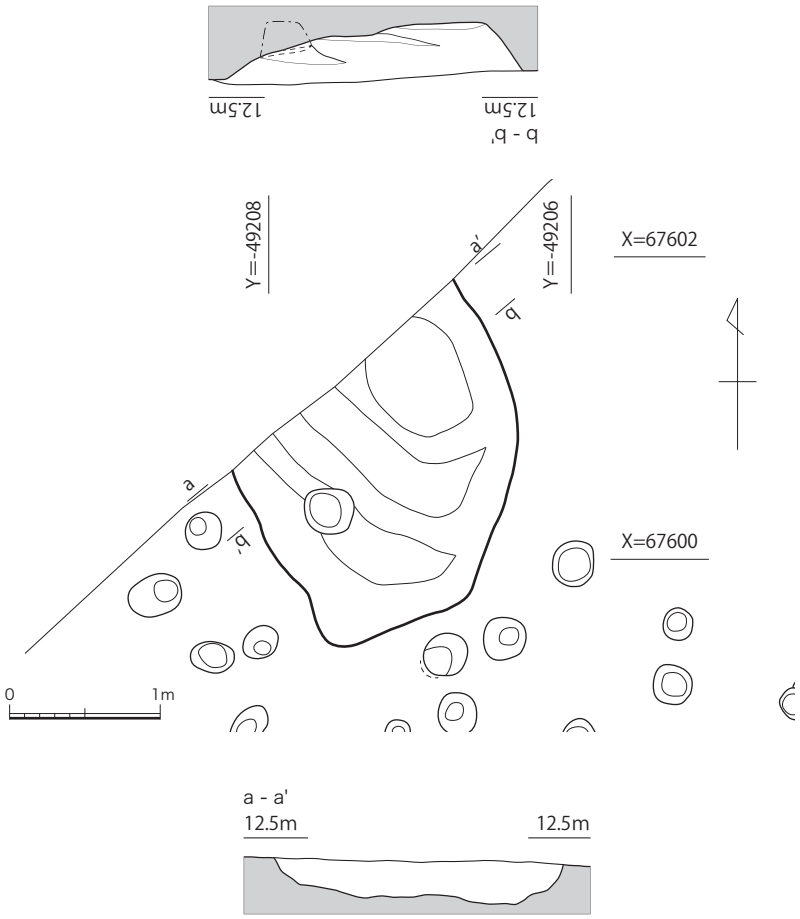

第 7 図　SB3 平面図、断面図（1/80）



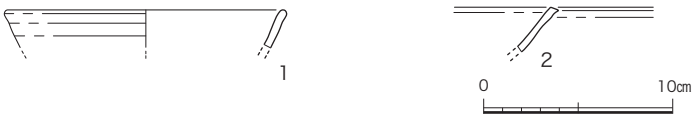

第 8 図　SK1 平面図、断面図（1/50）



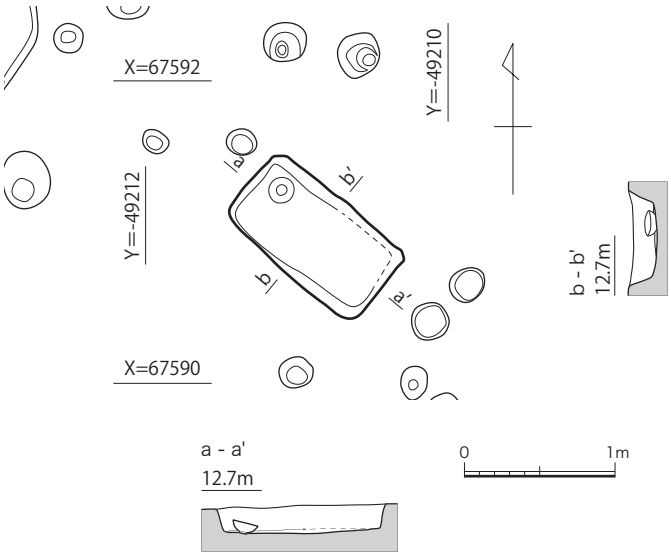

第 9 図　SK1 出土遺物実測図（1/4）




第10図　SK2 平面図、断面図(1/50)




第11図　SK2 出土遺物実測図(1/4)




第12図　SR1 平面図、断面図(1/50)

径 14.8cm、残高 2.0cm を測る。色調は灰白色、胎土に褐色微粒子を含み、焼成は良好。

## 土壙墓

### SR1（第 12 図）

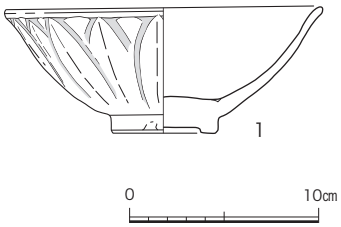
平面形は、長方形で断面が逆台形を呈す。長さ 1.13m、幅 0.62m、深さ 0.18m を測る。形状は整っており、底面がやや湾曲する。土層断面では捉えられなかったが、木棺墓の可能性があり、全体の大きさからして未成人のものとも考えられる。副葬品として青磁椀が北側の隅から検出されている。

### SR1 出土遺物（第 13 図）

**1** 完形の龍泉窯系青磁椀、口縁部は丸みを帯びて緩やかに外反し、体部に鎬蓮弁文を配す。高台底部の釉は、掻き取っている。口径 16.80cm、器高 6.7cm、底径 5.4cm を測る。色調はオリーブ灰色、胎土に石英の微砂粒と褐色及び黒色の微粒子を含む。

### SR2（第 14 図）

平面形は、隅丸長方形で断面が逆台形を呈す。長さ 1.68m、幅 0.66m、深さ 0.19cm を測る。墓




第13図　SR1 出土遺物実測図(1/4)

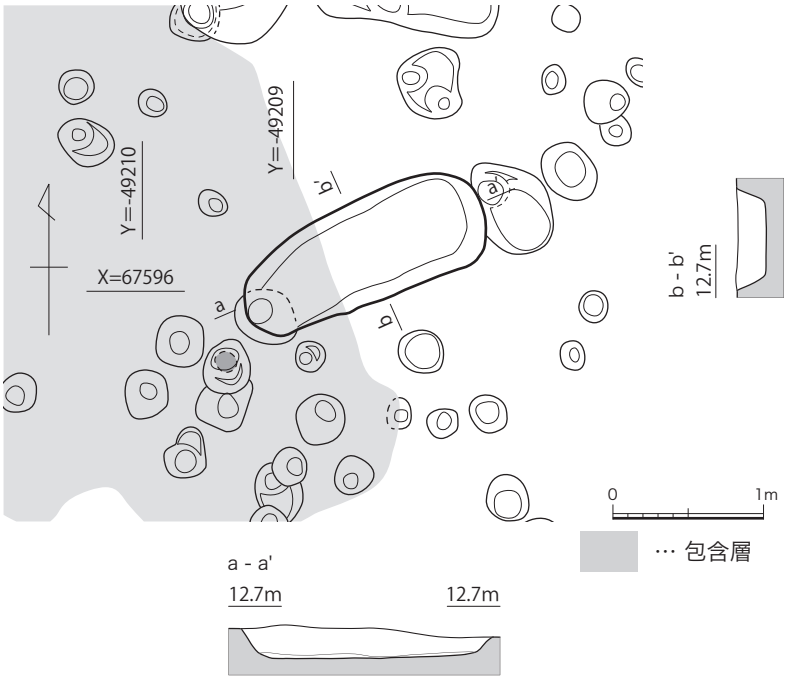
坑の東西小口面がそれぞれピットを切っている。出土遺物はない。

SR3（第 15 図）

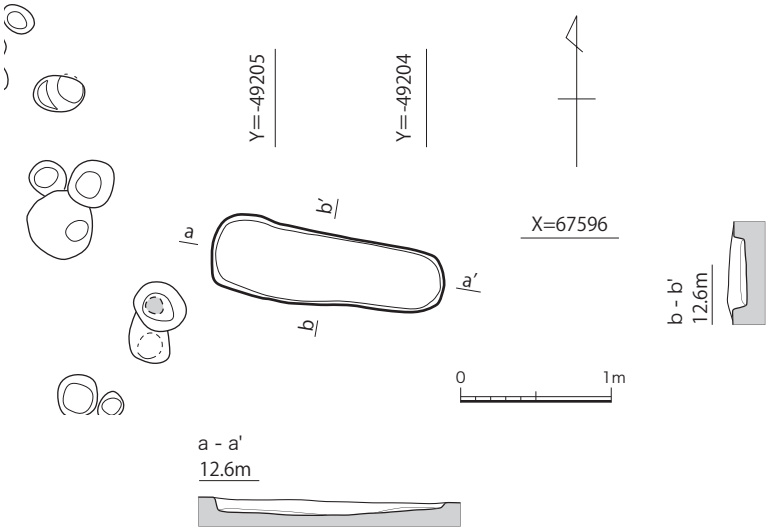
平面形は、隅丸長方形で断面が逆台形を呈し、中央がやや低くなる。長さ 1.55m、幅 0.50m、深さ 0.12m を測る。出土遺物はない。

## ピット出土遺物（第 16 図）

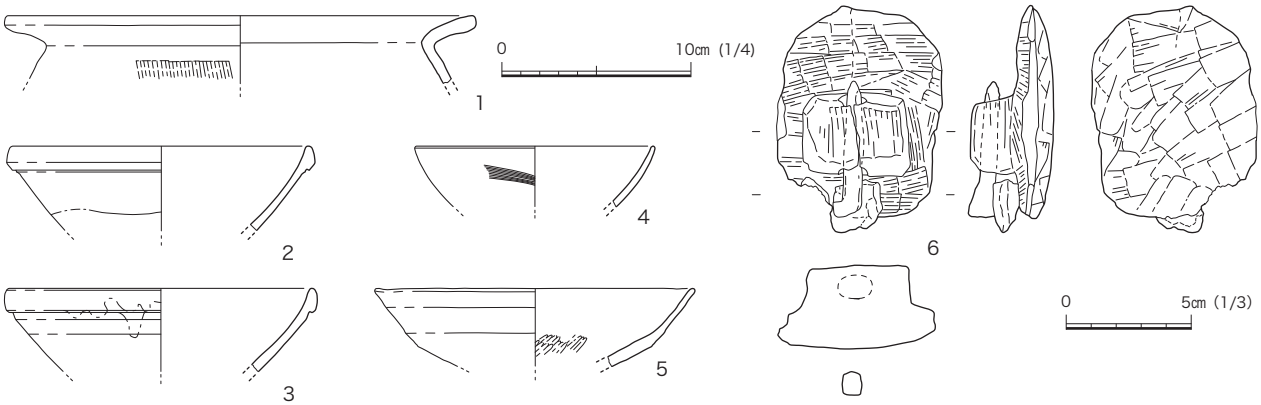
**1** 弥生土器、甕、口縁部がくの字状に近く、胴部が張る形状と考えられ、口縁端部を丸く納める。外面はハケメ、内面をナデにより仕上げる。口径 24.4cm、残高 3.6cm を測る。色調はにぶい赤褐色、胎土に砂粒を含み、焼成は良い。**2** 白磁、椀、口縁部は玉縁口縁で、釉は体部中程までかかる。口径 15.8cm、残高 4.5cm を測る。色調は灰黄色、胎土はやや粗く、黒色粒子を含み、焼成は不良。**3** 白磁、椀、口縁部は玉縁口縁で、釉は口縁部から体部中ほどまで厚めにかかる。口径 16.2cm、残高 4.4cm を測る。色調は灰白色、胎土に黒色粒子を含み、焼成は良好。**4** 白磁、椀、口縁部は丸みを帯び緩やかに内湾し、外面に櫛目文を施す。口径 12.6cm、残高 3.2cm を測る。色調は灰白色、



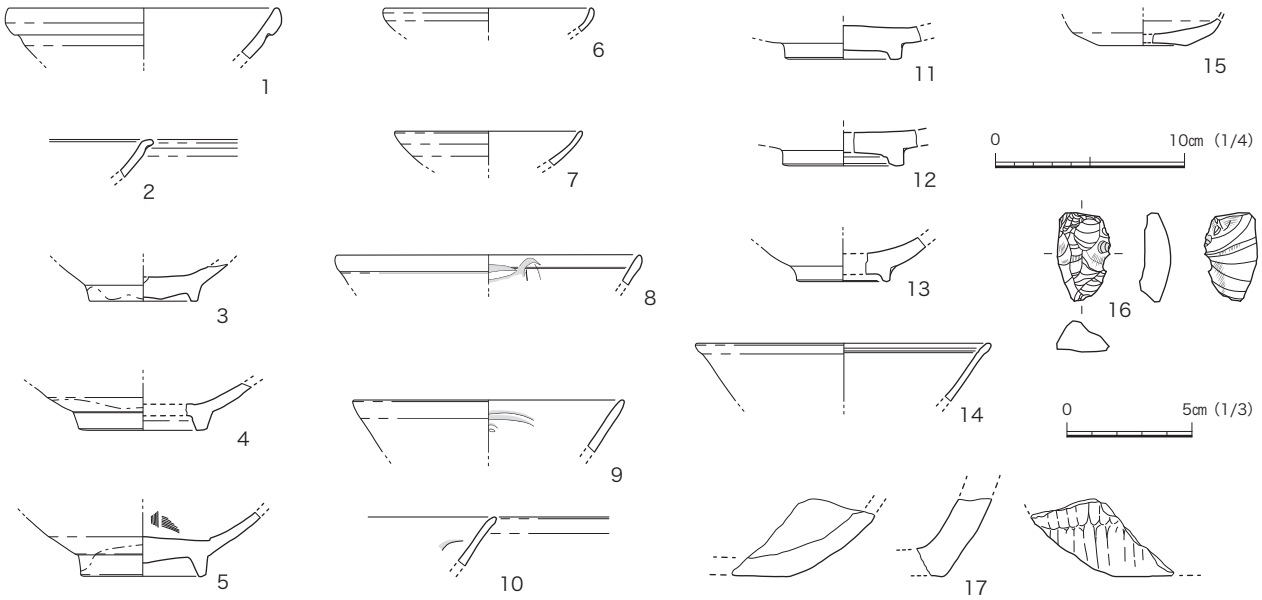

第 14 図　SR2 平面図、断面図（1/50）




第 15 図　SR3 平面図、断面図（1/50）




第 16 図　ピット出土遺物（1 ～ 5：1/4）（6：1/3）




第 17 図　包含層出土遺物（1 ～ 15、17：1/4）（16：1/3）

胎土に黒色粒子を含み、焼成は良好。**5** 瓦器、椀、口縁部は直線気味に外反し、体部との境がわずかに屈折する。調整は内面にミガキが見られるが、外面は磨滅して不明。口径 16.8cm、残高 4.1cm を測る。色調は黒褐色を呈す。**6** 滑石製品、スタンプ状石製品、石鍋の把手部分を横向きにして再利用したと考えられ、裏面把手部の左右を切断し、両側面を上下に粗く削り、その後、上下の面は左右方向に直線的に粗く削る。把手中央には、孔を開けてそこに鉄釘を差し込み、釘頭部の下に滑石片を押し込んで釘が動かないように固定させている。正面は隅丸方形、あるいは楕円状を呈すが、幅広の工具で丁寧に削りながら、全体が緩やかな凸面を呈すように仕上げる。なお、使用のためか正面は擦れて滑らかになっており光沢部分も存在する。本体の長さ 9.0cm、幅 6.2cm、厚さ 1.5cm、把手部の長さ 4.2cm、幅 3.0cm、厚さ 1.4cm、鉄釘の長さ 6.0cm、0.8cm を測る。

## 包含層出土遺物（第 17 図）

**1** 白磁、椀、口縁部は幅広の玉縁状を呈し、下部を沈線に窪める。口径 14.1cm、残高 2.7cm を測る。色調は灰白色、胎土に褐色の微粒子を含み、焼成は良好。**2** 白磁、椀、口縁端部がやや丸みを帯び、下方が凹面をなす。残高 2.0cm を測る。色調は灰白色、胎土に黒色の微粒子を含み、焼成は良好。**3** 白磁、椀、高台は細身で直立し、底部は厚みがある。釉は高台付近にまでかかる。残高 1.9cm、底径 5.8cm を測る。色調は灰白色、胎土に褐色と黒色の微粒子を含み、焼成は良好。**4** 白磁、椀、高台は高く太めで内湾気味に立ち上る。釉は高台の上までかかる。残高 2.5cm、底径 6.4cm を測る。色調は灰白色、胎土に褐色と黒色の微粒子を含み、焼成は良好。**5** 白磁、椀、高台は高く内湾気味に立ち上り、底部が厚底気味となる。内面には櫛描文を施し、釉は高台の上までかかる。残高 3.4cm、底径 6.4cm を測る。色調は灰白色、胎土に 2mm 程度の長石粒を含み、焼成は良好。**6** 白磁、皿、口縁部は内湾し、口縁端部を丸く納める。口径 11.0cm、残高 1.3cm を測る。色調はにぶい黄橙色、胎土に赤褐色微粒子を含む。色調、釉の細かなヒビや剥落状況から、2 次焼成の可能性がある。**7** 白磁、皿、口縁部は内湾気味に開き、口縁端部が丸みを帯びる。口径 9.8cm、残高 1.8cm を測る。色調は灰白色、胎土に黒色微粒子を含み、焼成は良好。**8** 龍泉窯系青磁、椀、口縁端部はわずかに玉縁状を呈し、内面に 1 条の沈線が廻り、櫛描文と片彫の蓮花文の一部が観察される。口径 16.0cm、残高 1.6cm を測る。色調はオリーブ灰色、胎土に褐色と黒色の微 粒子を含む。**9** 龍泉窯系青磁、椀、口縁部は直線的に開き、内面に片彫りの連花文が一部観察される。口径 14.2cm、残高 2.8cm を測る。色調はオリーブ灰色、胎土に黒色微粒子を含み、焼成は良好。**10** 龍泉窯系青磁、椀、口縁部は直線的に開き、内面に片彫りの文様が一部観察される。残高 2.6cm を測る。色調は緑灰色、胎土はきめ細かく、焼成

は良好。**11** 龍泉窯系青磁、椀、高台は直立し底部がやや厚い。残高 1.8cm、底径 5.8cm を測る。色調はオリーブ灰色、胎土に褐色と黒色の微粒子を含み、焼成は良好。**12** 龍泉窯系青磁、椀、高台は太めで直立する。残高 1.9cm、底径 5.7cm を測る。色調はオリーブ灰色、胎土に褐色と黒色の微粒子を含み、焼成は良好。**13** 龍泉窯系青磁、椀、高台は細く直立する。残高 2.4cm、底径 4.6cm を測る。色調はオリーブ灰色、胎土に褐色と黒色の微粒子を含み、焼成は良好。**14** 同安窯系青磁、椀、口縁部は直線的に開き、口縁端部がわずかに玉縁状を呈し、内面には 2 条の平行沈線が廻る。口径 15.4cm、残高 3.1cm を測る。色調は灰オリーブ、胎土に微量の石英粒と黒色微粒子を含む。釉は剥落し露胎がにぶい黄橙色を示しており、2 次焼成を受けたと考えられる。**15** 同安窯系青磁、皿、体部外面が屈折し、底部は上底をていす。残 高 1.4cm、底径 4.6cm を測る。色調は灰色、胎土に褐色と黒色の微粒子を含み、焼成は良好。**16** 漆黒の黒曜石、剥片、厚手で表面には複数の剥片剥離痕があり、末端にはヒンジ・フラクチャーが観察される。長さ 3.5cm、幅 2.1cm、厚さ 1.25cm を測る。**17** 滑石製石鍋、底部付近に相当する。表面は上下に加工痕が観察される。残高 4.1cm を測る。

## おわりに

今回検出された遺構は、掘立柱建物 3 棟、土壙墓 3 基、土坑 2 基、ピット等である。まず、掘立柱建物は 2 棟が重複しており、切り合い関係から SB2 → SB1 という前後関係が判明している。SB2 の柱間は、P1 ～ P2 ＝ 1.77m、P2 ～ P3 ＝ 1.65m、P3 ～ P4 ＝ 1.87m、P4 ～ P5 ＝ 1.82m、P5 ～ P6 ＝ 1.80m、P6 ～ P7 ＝ 1.60m、P7 ～ P8 ＝ 1.76m、P8 ～ P9 ＝ 1.96m、P9 ～ P10 ＝ 2.05m、P10 ～ P1 ＝ 1.75m となり、平均で 1.803m となる。また、SB1 の柱間は、P1 ～ P2 ＝ 2.07m、P2 ～ P3 ＝ 2.05m、P3 ～ P4 ＝ 2.00m、P4 ～ P5 ＝ 2.06m、P5 ～ P6 ＝ 2.05m、P6 ～ P7 ＝ 2.02m、P7 ～ P8 ＝ 1.93m、P8 ～ P9 ＝ 2.12m、P9 ～ P10 ＝ 2.05m、P10 ～ P1 ＝ 2.00m となり、平均で 2.035m となる。2 棟の建物は、柱間 1 間の寸法が 1.80m 前後から 2.0m 前後へと間隔が広くなっており、面積にして 19.5㎡から 24.8㎡へと 5.3㎡の拡張が見受けられる。これは、建て替えによって建築面積がやや増加したものと考えられるが、両建物の間で柱間が 6 寸ほど長くなった理由については判然としない。

また、SB3 については、P1 ～ P2 と P4 ～ P5 の平均が 2.13m、P1 ～ P5、P2 ～ P4 の 平 均 が 2.39m となる。P3 と P6 はともに柱の中心ラインの外側に位置しており、建物の外側に柱を設けて屋根の棟を支える棟柱と考えたい。また、棟柱下方において高床の床板下に梁を通し、床の補強材としたのではないかとも考える。本来、この建物は 1 間 ×1 間の建物で重量物を納めた倉庫であり、棟と床を支える柱をあえて外側に設けることで、内部の四方柱部分を除いた壁面には柱の突出部分がなく、壁面に物を密着させて収納することが可能となるため、スペースの無駄を省くことが出来たと考える。例えば木箱のような直線的なものを隙間なく収納するための工夫ではないか。

次に、掘立柱建物の SB1・SB2 と土壙墓 SR1・SR2・SR3 との関係であるが、遺構の分布を観察すると、建物の東西と北に 1 基ずつ存在しており、建物を意識したようにも見える。しかし、SB1 の柱穴から出土した内黒の椀と土師器椀を観察すると、ともに高台は低く丸みを帯びており、形状的には五条 I–3B の 11 世紀初頭～中葉頃のもの (1) に近似する。また、SR1 の副葬品と考えられる龍泉窯系の鎬蓮弁を有する青磁椀は 13 世紀前後～前半頃の所産 (2) と考えられ、掘立柱建物群と土壙墓群は 2 世紀ほども差がある。つまり、建物群のかなり後に墓地として利用されたことが理解されよう。

なお、墓地として利用された 13 世紀前半の時期は、当遺跡から北西に 150m ほど離れた地点に中世の居館（志賀神社遺跡）が存在しており、ちょうど最盛期の姿を見せていた。そのため、墓地と居館とは何らかの関係にあったとも考えられる。

註

(1) 福岡県教育委員会 1978「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」8 集（下）

(2) 粕屋町教育委員会 2021「志賀神社遺跡」粕屋町文化財調査報告書 第 56 集

調査地全景（西から）

SB1、SB2完掘状況（南西から）

SK1 完掘状況（西から）

SK2 完掘状況（南から）

SR1 半截状況（北西から）

SR1 土層状況（北東から）

SR1 土層状況（南西から）

SR1 遺物出土状況（南東から）

SR1 完掘状況（北西から）

SR2 半截状況（南西から）

SR2 土層状況（南から）

SR2 土層状況（北から）

SR2 完掘状況（北東から）

SR3 完掘状況（西から）

第13図1(内面)

第16図2

第17図1

第13図1(外面)

第17図5

第16図1

第17図16

第16図6

第16図6

## 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | なかばるいけのうちいせきだい２ちてん |
| 書名 | 仲原池ノ内遺跡第２地点 |
| シリーズ名 | 粕屋町文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第 57 集 |
| 編著者名 | 福島日出海、朝原泰介、髙橋幸作 |
| 編集機関 | 粕屋町教育委員会 |
| 所在地 | 〒 811-2314　福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目１番１号 |
| 発行年月日 | 2022 年 3 月 31 日 |

| 所収遺跡名 | 所　在　地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 仲原池ノ内遺跡<br>第２地点 | 福岡県糟屋郡粕屋町<br>仲原二丁目 2039-7 | 403491 | 280235 | 33°36′30.2″ | 130°28′11.3″ | 2021.1.5<br>～<br>2021.3.4 | 約 430㎡ | 宅地造成、専用住宅 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 仲原池ノ内遺跡<br>第２地点 | 集落 | 弥生時代、平安時代、鎌倉時代 | 掘立柱建物、土坑、土壙墓 | 弥生土器、土師器、青磁、白磁、陶器、石器 | |


要約

調査では、掘立柱建物３棟、土壙墓３基、土坑２基、ピット等を検出した。遺物は、白磁と青磁が中心で、11 世紀初頭～中葉頃と 13 世紀前後～前半頃の２群に分かれており、前者は掘立柱建物群の時期に、後者は土壙墓群の時期にそれぞれ相当しよう。つまり、掘立柱建物群の廃絶後に土壙墓群が造営されており、集落から墓地へと土地の利用が変化した状況を示す。

なお、墓地の造営期である 13 世紀頃は、当遺跡の南西 150 mほどの位置に志賀神社遺跡の居館が存在しており、墓地と居館との関連が想定される。



仲原池ノ内遺跡第２地点　　粕屋町文化財調査報告書第 57 集

令和４（2022）年３月 31 日　発行

発行　　粕屋町教育委員会
〒 811-2314　福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目１番１号（粕屋町立歴史資料館）

印刷・製本　株式会社九州カスタム印刷
〒 812-0007　福岡県福岡市博多区東比恵三丁目 16-15